

# 「文学」の参加・体験型授業を目指して

## －「総合学習」型授業の目標・方法の応用－

堀 竜 一（言語文化コミュニケーション講座・国文学）

昨年度、教職科目として新たに導入された「総合演習」を担当し、学生たちとともに活動に取り組んでみて、「総合的な学習の時間」や「総合演習」（以下、便宜的に「総合学習」型授業と呼ぶ）の授業の主旨・枠組・方法が、従来の講義・演習にも有効ではないかという感触を得た。そこで、本年度、全学共通科目「絵本をつくろう」を「総合学習」型授業に組んでみた。以下に、その実践を報告し、「総合学習」型授業の有効性を検討する。

[キーワード] 「総合学習」型授業 参加・体験型授業 「学びの動機づけ」と「学びの技法」

### はじめに－「総合学習」型授業の「総合性」－

昨年度、学校教育課程国語教育専修の2年生とともに実践した「総合演習（言語生活・言語文化・言語教育）」は、現場で今年度から実施される「総合的な学習の時間」の指導法の学習というだけでなく、学生が自ら体験することが主旨の「総合的な学習」でもあるという、新たな目標を持った授業であった。暗中模索しながら自分たちの「体験」を計画・組織していく活動をともにし、その過程で、そもそも「総合」とは何かという問題を常に意識させられた。「専修」の専門領域を組み合わせた、あるいは越えたテーマの横断性・総合性か、講義・演習・実験・実習といった従来の授業形態・学習形態を組み合わせた、あるいは越えた方法の総合性か。従来、教養科目を中心に、複数の講師によるオムニバス形式の講義で一つの大きなテーマ、「複合領域」的テーマにさまざまな角度から迫る「総合科目」が推進・実施されて来た。これは、新たに生じてきた地球規模の現代的課題に迫り、解決するために、従来の細分化された研究領域の知を統合・総合しようとする動きと関連している。テーマの横断性・総合性を目指す「総合科目」と「総合学習」型授業とはどのように関わるのであろうか。<sup>1)</sup>たとえば「小学校学習指導要領〔総則〕」では、「総合的な学習の時間」のねらいとして次の2点を上げている。

(1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。

(2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

ここで問題にされているのは、「学び方」や「ものの考え方」という学びの基礎・基本と、「自ら」「主体的に」という「態度」である。「小学校学習指導要領〔総則〕」では「総合的な学習の時間」のテーマとして、情報・環境・国際・福祉・地域の課題等が例示されても

いるが、テーマの横断性・総合性と「自ら」「主体的に」という学びの基本的な「態度」とはどのように関わるのであろうか。「自ら」「主体的に」という学びの基本的な「態度」は、「総合的な学習の時間」に限らずあらゆる学びの根底に位置づけられる学びの原動力と考えられる。テーマの横断性・総合性が、個々の既成の学び・専門領域のユニットの集合（応用）だとすれば、両者は一見かけ離れているように思える。しかし、個々の既成の学び・専門領域のユニットを結びつけるために、「自ら」「主体的に」という学びの基本的な「態度」が必要であると関連づけられないだろうか。ここで仮に、「学び」の内容（テーマ）を成立させる枠組みを「学びの技法」と「学びの動機づけ」の両面に分けて考える。「自ら」「主体的に」という学びの基本的な「態度」を「学びの動機づけ」とするなら、「総合的な学習の時間」で目指される「課題追究能力」「問題解決能力」は、「自ら」「主体的に」に関わる「学びの動機づけ」という原動力が、「学びの技法」に支えられた個々の学びを貫き、積み重ね、学びの全体を組織して行くことによって養われると考えられるだろう。現在、大学でもいわゆる学生の「学力低下」が問題となっている。そのため基礎的・基本的な「学びの技法」の習得のための「スタディ・スキルズ」がカリキュラム上実施されつつある。しかしそれは「学びの動機づけ」と有機的に連動していなければ有効に機能しないだろう。「学びの動機づけ」と「学びの技法」とは相互に作用し、影響しあい、螺旋的に自覚化・活性化されて行くのだとして、その両者の相互作用をある程度理論的にシステム化できないだろうか。現実の授業の中で両者を関連づけつつ学生の「学力」を高める有効な授業システムを構築できないだろうか。今年度第1期の全学共通科目「絵本をつくろう」はそのような問題意識に立ち、「自ら」「主体的に」という学びの「態度」とテーマの横断性・総合性をシステム化しようと試みた実践である。以下に授業の概要を報告し、問題点を検討する。

## 1. 授業の主旨

まず、全学共通科目の『講義概要(シラバス)』から「絵本をつくろう」の<科目の概要と目標>及び<受講に当たっての留意事項>を示しておこう。

<科目の概要と目標>

絵本づくりと絵本に関わる社会的活動(実践)を通して、絵本の(みる, 読む, つくる)魅力や力、子どもにとっての絵本や物語の意味、子どもの読書環境等々について考える。

具体的には、聴講者を3~4人に班(グループ)分けし、班ごとに①絵本を制作する。②それと同時に、それをもとに絵本に関わる活動(インタビュー, アンケート調査, 子どもへの読み聞かせ, コンクール応募等々)を構想する。中間報告会で絵本制作の経過報告と活動の企画(「企画書」)を発表。アドバイスを受けて絵本制作を見直すとともに、「最終案」を検討・作成, 活動を実施する。そして最終報告会で半期の活動全体を振り返り、毎回の「活動記録」と合わせ「報告書」を作成する。企画に基づいた実際の活動は、教室や授業時間の外で行うことになる。内容的にも授業形態としても新しい試みとして、聴講者の皆さんと手探りで、協力し合いながら学習・活動して行きたい。

絵本をめぐる企画立案から振り返りまでの流れの中で、課題発見, 課題追求, 計画立案, 資料調査(情報収集), 発表, 討論, 報告書作成, 自己評価等々の総合的な学力を養うことが目標。

<受講に当たっての留意事項>  
1, 絵本・児童文学・物語・ファンタジー好き, 読書好きの学生向けの授業。2, 多くの絵本, 子どもの本を紹介するので, 購入したり, 図書館で借りるなどして積極的に読み広げて行ってほしい。3, 様々な観点から自由にアイデアを出し合い, 積極的・主体的に活動を作り上げて行ってほしい。

本授業は、これまで10年以上にわたり全学共通科目(昨年度までは「教養科目」)の「文学」「日本近代文学」として実施してきた講義を組み替えたものである(人文科学科目の文学・言語に区分)。従来、夏目漱石や芥川龍之介などの作品を実際に読み進めて行くという形態の授業であった。物語を読むという行為が自分の生きている現実といかに関わるのか常に意識化するように授業を組み立てようと試みて来たが、今回「絵本」をテーマに、その試みをさらに授業システムとして明確化・具体化しようと考えた。そこで、授業を通して学生が自ら具体的な活動を構想・実施するという、班活動で知恵を出し合って問題解決に当たるということを柱にプロジェクト型授業として新たに構想を立て

た。世界や日本の「絵本」の歴史, 分野, 作者・画家について、「学問的」に整理・展望し, 多くの知識を得るというのが主たる目的ではなく、「絵本」が身の回りの現実・日常の中でいかなる広がりを持っているのか、「絵本」と「読者(自分一人ではなく, 自分を含め多くの読者)」との生き生きとした関係、「絵本」が現実と与える力, 現実を変えて行く力を実感的に理解することに重点を置いている。学生にはしばしばその点を強調したが, 実際には自らの絵本をつくる活動で自足してしまい, その絵本が教室の外の世界とどのようにつながりを持つのか, 大きな関連づけて「絵本」を考える観点, 「絵本」とそれにかかわる自分とをメタ・レベルから眺める観点を持つに至るのは困難だったように思われる。これは学生の活動を「①絵本を制作する。②それと同時に, それをもとに絵本に関わる活動(インタビュー, アンケート調査, 子どもへの読み聞かせ, コンクール応募等々)を構想する」と, 二本立てにしたこととも関連している。「絵本」は言うまでもなく, 「文学」と「美術」の両方にまたがる分野である。いわばそれ自体テーマとして「横断性・総合性」を持っている。①, ②はそれぞれ個別に見てもテーマの「横断性・総合性」に関わっているが, ①, ②を組み合わせることで, そのテーマ性をより強く浮き立たせようと考えたのである。仮に①の活動だけなら, 最初から手順が決められ, 道具から何からすべてお膳立てが整えられた環境で, 懇切な指導・支援を受けながら一つ一つ必要な技術を習得し, 絵本の完成に到達する絵本づくりの講習会になってしまうかもしれない。また, 絵本の美術的完成度を追求するなら, 私一人では対応しきれない。美術の専門の先生とティーム・ティーチングで行うことも考えられる。そうした授業の方向性について今後検討が必要であるが, 今回ここで目指すのは, 手順も道具も技術の習得も, すべて「自ら」プログラムを考えるということである。そのためには, 「絵本」に関するあらゆる事柄を視野に入れていなければならない。①の活動は②への発展性を視野に入れた上で成り立つという位置づけなのだが, この①と②の関連づけについても, 今後検討し直す必要があるだろう。

## 2. 授業の展開

### 2-1. ゲスト・スピーカーを招いて

ガイダンス時に授業の主旨を説明し, 「学習の動機づけ」を促すことはいかなる授業でも行うことだが, 「総合学習」型授業でよく行われる「学習の動機づけ」は, 導入時にゲストスピーカーを招き, 興味深い話をしてもらうことである。「総合学習」型授業では, 一つのテーマを, 教科横断的・分野横断的に, 地球的・現代的

な課題に関連づけていく。教室の中だけでは追究は完結しない。そこで、現実（地域）の中で活動している人の姿に接する必要が生じて来る。またそのことが学習者にとって新たな発見にもつながり、「学習の動機づけ」を促すことにもなる。ゲストスピーカーを招くのはそのような意味がある。今回は、本学部の先生の御家族で、お子さんが通う小学校を中心に絵本の読み聞かせのボランティア活動に取り組んでおられるK・Yさんという方に来ていただくことにした。Kさんへは依頼状で、「今年度から小学校・中学校で始まる「総合的な学習の時間」の大学生版として、参加体験（ワークショップ）型・プロジェクト型の授業を構想している」と、授業の主旨を説明した上で、「①絵本の魅力、絵本と子ども、絵本と大人、②絵本の読み聞かせの実際—できるだけ具体的に（できれば実践も）、③絵本の今後、④絵本の読み聞かせへの誘い」をお話の中に織り込んでもらいたいとお願いした。Kさんは知り合いのS・Yさんにも声をかけてくださり、3回目の授業に二人でお越しいただいた。

クラスは全学部のほぼすべて1、2年生で50人強である。定員50人のところ、珍しく聴講希望者が定員を大幅に越えて集まった。「絵本をつくろう」という講義名にも珍しさを感じたためもあるだろう。絵本の制作道具の数量的・物理的制約や、参加型グループ活動という授業形態の問題もあり、「『講義概要』を読み、どのような授業をイメージしていますか？」等の3つの課題に答えてもらい、絞った。書かれたものを読むと、高校までに実際に絵本づくりをしたことのある学生や、絵を描くのが好きでこの授業を希望したという学生が見受けられた。また、当初指定された教室は机が固定された階段教室だったので、適宜機の配置を組み替え、グループになれる教室に移動した。ゲスト・スピーカーをお招きした当日は機の配置を半円形にし、ゲストスピーカーを囲むようにした。Kさんが用意してくださった「講義メモ」「絵本と読み聞かせに関する参考文献リスト」や絵本の読み聞かせについての新聞記事等の資料をあらかじめ配布する。授業時間の前半は、Kさんが実際に何冊も絵本を示しながら（『これはのみのびこ』『おだんごばん』『もこもこ』等）、①読み聞かせに向く本、向かない本について、②読み聞かせが子どもたちに与えるもの（読み聞かせの効用）について、お話をされ、最後に③地域での読み聞かせの実践例を、拡大コピーした写真を示しながら紹介された。授業時間の後半は、絵本の読み聞かせの実演で、まず読み聞かせのベテランSさんによる模範演技（『だいくのおにろく』『やさいのおなか』『子どもに聞かせる 世界の民話』）、ついで希望者二人が、順番にみんなの前に出て、先にKさんが紹介してくださった文・谷川俊太郎／絵・元永定正『もこもこ』（文研出版）で

読み聞かせに挑戦した。（＝写真1）後に学生の感想を紹介するが、学生たちにと

写真1 絵本の読み聞かせに挑戦



って、地域で実際に読み聞かせの活動に携わっている方から生のお話を伺うという体験は非常に新鮮であったらしい。また、Kさん、Sさんの読み聞かせに思わず引き込まれ、久しぶりに絵本の魅力を実感したようである。当日の「活動記録」（後述）や、半期の授業の最後に実施された「学生による授業アンケート（授業評価）」を見ると、ゲストスピーカーのお話を伺えただけでもこの授業をとってよかったと何人も学生が書いていた。

## 2-2. 絵本の制作と活動

毎回の活動は、先に述べたように「班ごとに①絵本を制作する。②それと同時に、それをもとに絵本に関わる活動（インタビュー、アンケート調査、子どもへの読み聞かせ、コンクール応募等々）を構想する。」というものである。班分けは、私の方ではほぼ4人ずつ、機械的に12班に振り分けた。男子学生対女子学生の比率がほぼ1：3だったので、各班男子学生が一人入ること、あとはできるだけ学部が重複しないようにした。初対面の者同士で協力し合って、一つのプロジェクトを計画・実践して行く力を養うということも、授業の目標の一つだからである。しかし、いつまで経ってもお互いになかなかうち解けず、協力関係を築き上げられない班がいくつか見られた。「仲よし同士で活動をしたかった」と「学生アンケート」に書いていた学生がいたが、しかしどのように班を構成しても同様な問題は常に生じうるであろう。授業者の側でどのように班の協力関係を生み出す手立てを工夫するのか、今後「学びの技法」と関連づけて考えるべき課題である。

授業の流れには二つの大きな区切りが設定されている。一つ目の区切りは中間報告会で、それに向けて班ごとに「企画書・初案」をまとめる。もう一つの区切りは、授業のまとめでもあるが、最終報告会である。「修正案・最終案」に基づき制作・実施した結果を報告する。二段階を踏んで、①絵本づくり、②絵本に関わる活動、この2つの構想を立て、実施するのであるが、先にも書いたように、両者を関連づけて構想することに困難を感じた班が少なからずあった。そもそも絵本づくりにしても、どのような物語にどのような絵をつけるのかといった企画から、判型、紙、画材の選

扱といった制作の工程，製本・完成まですべてを自分たちで決定することが求められ，議論で時間をとられ，肝心の作業に十分時間を使えなかった班が多かった。まして教室の外での絵本に関連する活動など考える余裕もなかったというのが実態であろう。

以下に，11班の「活動記録」を例にとって活動の展開を辿ってみたい。11班の班員構成は，人文学部2年生女子T，人文学部2年生男子K，教育人間科学部2年生女子A，工学部3年生女子Iである。学生は毎回「絵本をつくろう 活動記録」の提出が義務づけられていた。これは毎回本人に返却し，他の配布物とともにポートフォリオとしてファイルに保存させる。当初，授業時間の最後10分程度でその回の分の記録をまとめるという時間配分を考えていたが，どの班も毎回班活動だけでも時間が足りないようだったので，前回の「活動記録」を時間の初めに提出するように変更した。「活動記録」は「今日のテーマ」「活動の概要」「考察・次回の課題など」が主な記入項目である。適宜解説を加えながら，Tの「活動記録」を日時を追って示す。

**4月19日**／今日のテーマ＝班の活動を決め，発表する／活動の概要＝今後の班の活動方針を決め，皆の前で発表する。①役割分担：毎回じゃんけんで決める ②自己紹介：チームカラー等は裏面に記載 ③班の名称：すいか工場／考察・次回の課題など＝初対面ではあったけど，すぐに団結できた。皆積極的に意見を出しあえ，比較的早く方針が定まった。これからも仲良く団結して絵本作りにとりこんでいきたい。／裏面記入＝②チームカラー：元気に・赤・オレンジ・黄・若い・童心を忘れない 抱負：◎頑張る，仲良く ◎子どもの心を知る ◎いたずら心を忘れない ◎絵本を通して自分の心を知る ◎気合いを込めて全力で 連絡係：Iさん ③班の名称 ◎すいか工場

**解説**＝ガイダンスの次の回の授業。初めての班員の顔合わせである。まず教室を移動し，以下の1.～3.を印刷したプリントを配布。1. 本日の活動予定，2. 各地区公民館で行われている「ボランティアによる絵本を楽しむ会」のリスト，3. 班分けのメンバー表。「活動記録」にある①～③は，プリントの1.で指示したものである。その後，各班，全員の前で班の自己紹介を行う。その他プリントの1.では，「時間外・教室外での活動」として，「各自できるだけ，幅広く，多くの情報を収集すること。そのためにも，多くの絵本，子どもの本，関連文献を読むこと」と注意を促している。これは『講義概要（シラバス）』の＜受講に当たっての留意事項＞と呼応している。これと並び，3回の課題も予告している。後に「私の一冊（5月）」「私の

一冊（6月）」「私の一冊（7月）」として提出されたものだが，実際に市立図書館や市内の書店に足を運び，絵本を手にとってみるのが情報収集・絵本理解の基本となると考えたからである。最後の「学生アンケート」でこの3回の課題が負担だったと書いた学生が何人かいた。土日もサークル活動やアルバイトに追われ，市立図書館や書店に出かけることもままならないという学生もいるが，やはり多くの絵本に触れ，絵本のイメージを抱いていなければ，絵本づくりも絵本に関連する活動も構想はできないだろう。

**4月26日**／今日のテーマ＝ゲストスピーカーの話の聞こう／活動の概要＝◎ゲストスピーカーの方のお話を聞く。・読み聞かせのイロハ ◎実際に絵本を読んでもらい，また，読み聞かせに挑戦してみる／考察・次回の課題など＝今までは，読み聞かせにあんなにたくさんのコツがいるなどとは考えたこともなかった。実際に，ゲストスピーカーの方に絵本を読んでもらっている時には，自分の年も忘れ，夢中になって聞いている自分がいる事に気がついた。機会がある時には私も是非，読み聞かせにチャレンジしてみたいと思う。

**解説**＝「考察・次回の課題など」に書かれている感想と同様の感想を多くの学生が持った。私としては，その後個人的にでも絵本の読み聞かせの活動に参加する学生が現れることを期待したが，意外にも興味・関心を現実の活動に直ちに結びつける学生はいなかったようである。また，当然，絵本に関わる活動として，子どもへの絵本の読み聞かせを構想した班もあったが，実現はしなかった。

**5月10日**／今日のテーマ＝絵本製作に向けて／活動の概要＝これからの絵本作りの主旨（自作にするか，絵をつけるものにするか等どんな絵本にしたいのか，絵本作りの方向性等）をきめた。／考察・次回の課題など＝皆積極的に，しかし相手の意見を尊重しあいながら話しあいのできたのでよかった。絵本作りにむけての主旨等もスムーズに決まったし，有意義な話しあいだったと思う。これからも，お互いの意見を尊重しつつ，皆が満足できるような話しあいをしていきたいと思う。・次回，自分の好きな絵本を持ってくる ・ストーリー性のあるもの ・全部自作で

**解説**＝この回に限らず，イメージづくりができるように適宜3種類の資料を配付する。一つ目は，絵本づくりの手順に関するもの。『講義概要』の＜参考文献＞に上げた池田あきこ『ダヤンの絵本づくり絵本』（MPC），柄折久美子『シリーズ・子どもとつくる えほん

をつくる』(大月書店)「[平綴じ]製本の仕方」(中央文化出版ブックス事業部)等のプリント。また、毎回教室に参考になりそうな本を持参し、希望に応じて貸し出しも行った。二つ目は、グループの活動に関するもの。廣瀬隆人他『生涯学習支援のための参加型学習(ワークショップ)のすすめ方ー「参加」から「参画」へー』(ぎょうせい)、中野民夫『ワークショップ』(岩波新書)、金安岩男『プロジェクト発想法』(中公新書)のプリント。三つ目は、絵本のコンクール等の情報。「山形県・『遊学館』外国絵本翻訳コンクール」、「花のまち可児・手づくり絵本大賞」(岐阜県可児市生涯学習センター)、「山田養蜂場 ミツバチの童話と絵本のコンクール」、「童心社 紙芝居作品募集」、「JOMO 童話賞」(ジャパンエナジー)、「ハンズ大賞」(東急ハンズ)等のプリント。これらを出発点に、あとは各自必要に応じて情報収集の手を広げて行くことも、授業のねらいの一つだったが、自主的に調べものをする学生はあまり見受けられなかった。学生の興味・関心の在り方、知識の広がり、理解の深まりをそのつどチェックし、ふさわしい支援を行うような手立てを講じる必要がある。

5月24日/今日のテーマ=絵本の趣旨をきめる/活動の概要=すいかが主人公・様々なすいかが出る=黒・黄・しかく・だえん・小だま・すいかが旅をする・画よう紙でつくる 色々なスイカに出会う・深い意味はない◎絵本の色(どんな話しにするか等)を決めた。内容は上記の通り。/考察・次回の課題など=今日は、絵本の中身を少しきめた。決まった内容は上記の通り。今回も皆で協力して、スムーズに趣旨を決めることができた。次回も協力して計画を立てていきたい。次週・活動企画の計画を中心に行う・各自考えてきた意見を出しあう・スイカを知る。・どんな活動ができるのか

解説=5回目の授業(5月17日は公務出張のため休講)。ここでようやく実質的な班の話し合いが始まる。初めての顔合わせで班の名称を「スイカ工場」と決めたのだから、スイカがテーマの絵本を構想するのは自然であろう。最後に完成したものから遡って振り返ってみると、この時点でおおまかな流れはでき上がっている。私としては、「スイカを知る」のなら、絵本に描かれたスイカを探す、実際にスーパーなどでスイカを見て回る、スイカの図鑑を調べる、などの見学・調査を行えばいいと思うが、指示を与えなくても自主的に活動するようにクラス全体を組織しておく必要があるだろう。また、他班は水彩紙、ケント紙に絵を描いて絵本を制作したのに対し、11班はこの時点ですでに色画用紙を切り貼りして作る手順まで構想していたこと

図1 11班「制作企画書(初案)」

絵本をつくろう 制作企画書(初案) 6月17日

11班(班名:すいか工場)氏名

1. 表題(タイトル)	未定
2. 特色・想定読者	特色: 文字は少なめで、響が長く「スイカ」言葉を使い、色画用紙を使い、糊貼りで作る。 想定読者: 幼児
3. 物語(本文)の概略・絵のイメージ・形態(サイズ)	物語: すいかが旅がてながらいろいろなすいかに出会う。 絵: 色画用紙を使って、色紙や紙の切り出し、糊貼りで作る。 形態: A4横型
4. 制作過程・道具と材料・予算	制作過程: 文章を考えてから、それ以外の場面も含めたすいかを作り、貼り付けていく。 道具と材料: 色画用紙、ハサミ、はし、コルパス、定規 など 予算: 400円(色画用紙(39.1cm×24.2cm) 1枚、30円(定規) 1本、10円(生協)

図2 11班「活動企画書(初案)」

絵本をつくろう 活動企画書(初案) 6月17日

11班(班名:すいか工場)氏名

1. 活動題目(プロジェクト名)	絵本に対する意識調査
2. 活動目的・目標(対象・ねらい)	大学生と、子どものいる父母を対象にして、大学生としての絵本と、子どものいる人としての絵本に対する意識の違い、アサーションについて対比して知る。
3. 活動計画・方法(日程・役割分担・予算)	6月中旬にアンケート用紙を配る。7月初め頃に回収。 アンケート内容 ① 大学生・父母のどちらかに片をつけて下さい。父母に片をつけた人は、子どもの年齢を書いて下さい。 ② 子どもの頃、家族に絵本を読んでもらったことはありますか。 ③ 絵本が読めて、好きな絵本をあげて下さい。好きな絵本をあげて下さい(例、僕の心、思ひ出、幼相、など) ④ 好きな絵本はありますか、あれば題名をあげて下さい。題名を忘れてしまった人は、内容・登場人物などが良いです。 ⑤ その他あれば、自由に書いて下さい。

になる（先の記述からはなぜ画用紙を用いるのか明確ではないが）。この後11班は5月31日、6月7日の2回を活動企画の話し合いに当てている。やはり一時間の中で絵本づくりの構想と活動の構想の両方を並行して立てるのは無理なようである。6月14日は中間報告会の第1回目で、1班～6班の発表。6月21日は中間報告会第2回目の予定が、私の病気で休講。このため、絵本の制作が一週間出遅れる。実際に制作に取りかかってみると非常に時間を必要とすることが判明し、学生たちに焦りの気持ちを生じさせてしまった。11班は6月27日の中間報告会第2回目で報告を行う。（＝図1、図2）その時に出されたアドバイス・意見を参考に、7月5日から絵本制作に取りかかり、また活動企画のアンケート調査の細部を詰めて行く。次に、絵本づくりでストーリーを細部までつめた7月12日の11班の「活動記録」を4人全員分掲げておく。（＝図3～図6）

この後、授業時間外にも各班の絵本づくりは活発化して行く。（＝写真2）「活動記録」には、「時間が無い」

写真2 制作風景



「絵本が完成するかどうか不安」といった感想が目につくようになる。7月19日の次の7

月26日は公務出張で休講。3回休講にしたので、授業期間を延長し、最終報告会を8月9日に設定する。授業内で絵本づくりをする最後になった8月2日にも、完成にはほど遠い班がいくつもあった。多くの班が試験期間でも時間をやりくりして集まったり、自宅で絵本づくりに精力的に取り組んだようである。この間、画材は各班からの申請に基づき、市内の画材店と大学生協とで以下に列挙するものを購入する。また、申し出のあった学生には適宜画材を貸し出す。

「白い絵本・手作りキット」（水彩紙・ケント紙・画用紙）、水彩紙、色画用紙、色鉛筆、水彩色鉛筆、パステル、水彩絵具、アクリルガッシュ、絵筆、パレット、三角定規、物指、ハサミ、カッターナイフ、デスクマット、ハケ、クリップ、ボンド。

これらは私の研究費で購入したが、物作りで予算はまず考えるべき重要な条件である。そもそも「総合学習」型授業は教室の外に出ての活動が多いので、予算の設定をまずよく考えた上で授業全体の計画を立てな

ければならない。

### 2-3. 評価

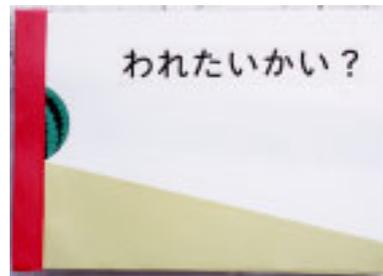
8月9日の最終報告会は、教室の前の机の上に展示された絵本を各自手にとって見て、気に入った絵本を2冊選び、ワークシートにコメントを書くという形をとった。（＝写真3）この会場でようやく完成させた班、結局未完成に終わった班、製本をやり直した班、製本が間に合わなかった班と、さまざまだが、他の班の制作した絵本を見る初めての機会でもあった。11班の絵本を取り上げた学生は10人。（11班の絵本＝写真4～6、他の班の絵本＝写真7～10）次にいくつか感想を上げてみよう。

写真3 最終報告会



写真4～6

11班の絵本『われたいかい』表紙と本文



面白いと思わなかったし、私は好きな作品ではなかった。結局何が言いたいのか分からなかったためである。たぶん対象年齢が低いのだろう。しかし、しっかりとした製本や、配色、「はり絵」の技法を使っていることなど、評価する点が多い。

ていねいに切り貼りされていて、計画どおりに製作されたのだろうと思わせる作品であった。(教育1年女)

昔好きだった「もこもこ」を思い出した。貼り絵な所もとても好きだ。絵本で大切なのは、極力をいえば、物語性ではなく、読者を楽しませることだと思う。そういった意味では、この作品のノリはとてもいい感じだと思う。(教育2年男)

ちょっとにわかには信じられない完成度。内容よりも(「よりも」という表現が正しいかどうかはともかく)テンポ重視というか言葉あそびの領域なので好き嫌いが分かれそうだが、パッと見たときのきれいさというかはおそらくズイイチ。随一? 個人的な好みから言えばさほどでもないが、非常に絵本らしい絵本だと思う。ただ、ラストにもうひとひねりほしいな! という気はある。ちょっとあっさり終わりすぎたような……。(人文1年女)

当の11班のAは8月2日の「活動記録」の「考察・次回の課題など」で次のように自己評価、授業評価をしている。

この授業で痛感したことは、実際にやってみる、ということは、莫大なエネルギーが必要だということである。今回の場合は、体力的なものというよりは、精神的なものとしてのエネルギーが必要だった。何かを作り出すということには、そこにたどり着くまでに、理想と現実のかねあいや、対人的なもの、自分の内部での葛藤など、様々な事柄が絡んでくる。私たちは、商業的なものとして作り出したのではないが、それでも1つのものを作り出すという経験が出来たことは、非常に有意義だったと思う。幸い、良い班員に恵まれたので、現段階では未完ながらも、自分たちが「面白い」と思える作品になったし、自分では思いつかないような発想に触れることができ、刺激的で楽しかった。様々な部分で、体験というにふさわしい授業だったと思う。

「体験」が「莫大な精神的エネルギー」を必要とするという感想は、そのこと自体に意義を見出すか否かは別として、多くの学生が抱いた感想でもあっただろう。「体験」は「学びの動機づけ」として個々の学びを貫き、学びの全体像を構築して行く。そこに「エネルギー」を注ぎ込むことは、それだけ学びの原動力が蓄えられたことを意味する。しかし学びの原動力は生きた力に転換されなければならない。その転換装置が「学びの技法」であり、学びの枠組み・構造である。「体験」の場の保証、「体験」の共有化、「体験」の記録化(言語化)と意味化、これらは「学びの技法」に関わる課題である。これらをシステムとして構築できるなら、

写真7 10班の絵本『小さな恋のうた』本文



写真8 7班の絵本『裏桃』(下)本文



写真9 4班の絵本『まんげつよののおくりもの』本文



写真10 6班の絵本『あわて床屋』表紙

今度は逆に「体験」という「学びの動機づけ」を活性化することができるだろう。「総合学習」型授業の目指す参加・体験型学習、プロジェクト学習の枠組みからまだまだ力を引き出すことができるように思われる。



今回の実践にはさまざまな課題が残された。参加・体験型の授業を行ってみて痛感するのは、情報量の少なさである。講義形式の授業は伝達者側から言えば、ほぼ完全に意味のある豊富な情報で授業の一時間が満たされる。演習にしても、講義ほどではないが、発表

と議論を通してのテーマに関する情報には無駄が少ない。参加・体験型の授業の場合は、情報を自分で生み出さなければならない。一つはテーマに関して必要な情報を自分で収集すること、もう一つは「体験」を情報として意味化することである。前者は、教室外の活動が多くを占めるが、先の述べたように、学生が必要を認識しない場合、「自ら」「主体的に」活動に向かうことは期待できないので、授業者側で何らかの働きかけを行わなければならない。それを「学びの技法」としてシステム化する必要がある。しかし、これは学生に応じて個別に行われるので、一律のシステムでは機能しない。また、一人の授業者が対応できるクラスの規模にも限界がある。後者の「体験」の意味化は、「学びの動機づけ」にも関連する。一時間の講義の情報量は非常に多いが、それが仮に正確に伝達されたとしても、受け手が意味化できなければその情報は生きた情報にはならない。「体験」を記録し、そこから意味を読みとり、自分とのつながりで解釈する一連の過程には試行錯誤に伴う無駄は必然的だし、またその時点ではどうしても意味化されずに残されてしまう部分も多い。それが情報量の少なさと受けとめられてしまうわけだが、しかしそうして生み出された少ない情報は受け手にとって、生きた情報なのである。いかに生きた情報を量的に増やし、他の生きた情報と関連づけて行くか、それをどのように「学びの技法」としてシステム化したらよいのか。今後もさらにさまざまな実践を積み重ね、検討・考察して行きたい。

## おわりに

「絵本をつくろう」受講者で、後期の全学共通科目「児童文学入門」に参加した学生は5名であった。継続の学生は10分の1ということになる。「学生アンケート」からも、「絵本をつくろう」の授業に関しては多くの学生がある程度充実感・達成感を抱いたという感触があった。同一の曜限でもあり、前期の延長の授業として紹介したにしては、残った学生が意外に少ないように思われる。いくつか要因が考えられるが、グループ活動が精神的に負担だったのか、毎回提出の「学習記録」や3回の課題、その他授業中の要求が多く負担だったのか、あるいは、特に後半は授業時間外での活動がしばしば必要となり、それが負担だったのか、いずれにしても負担感がかなり大きかったのではないだろうか。今回は思いつく限り、可能な限り、「学びの技法」につながるさまざまな試みをしようと心がけた。たしかに課題・要求が多すぎたのかもしれない。もう少し「学びの技法」を効率的に組み合わせ、学生が存分に力を発揮できる余裕を持たせる必要があるだろう。また、絵本の完成だけでも半期の授業内ではとても無

理で、通年にすべきという声も少なくなかった。完成にまで至らなかった班もいくつかあり、やはり最終的に活動が完結しなければ、それまでいくらエネルギーを費やしても、それは有意義だったと積極的に評価されないのもやむをえないだろう。後期の全学共通科目「児童文学入門」は前期の「絵本をつくろう」と同様に、参加・体験型、グループ型学習の枠組みで、「児童文学」の情報誌づくりを行った。「絵本をつくろう」とは別の「学びの技法」も試みた。いずれ別稿で報告・考察したい。

1) 拙稿「大学の総合演習とFD」(教育人間科学部・附属教育実践総合センター「総合学習」研究会(代表=宮菌 衛)『平成13年度 新潟大学プロジェクト推進経費(基礎的研究プロジェクト)研究報告書「総合学習」理論の基礎的研究』平成14年3月,新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター)参照。